

陣中川柳



麻生隆太郎



陣
中
川
柳

麻生路郎編

はしがき

★この句集は蘆溝橋に端を發した支那事變と大東亞戰爭とに勇躍征途につかれた防人たちの陣中吟を蒐めたものである。

★従つて、今は靖國の神と祀られてゐる英靈幾柱かの作品と、既に歸還されて職域に精勵されつつある人たちの陣中吟と、今なほ聖戰完のため闘ひ續けられてゐる人たちの作品との合纂である。

★作家の地域は随分廣範圍にわたつてゐるが、各地を轉戦されてゐる人たちもあり、再度の出征で、出征地を異にしてゐられる人たちもあるの

で、すべて省くこととした。

★本句集は聖戦完遂のため遠く異域に闘ふ皇軍將兵の勞苦を慟ふ一助ともならばとの念願の下に編んだのである。

★本句集刊行に際し、作家各位並びに表紙及び挿畫を煩はした柴谷宰二郎畫伯に深甚なる敬意を表する。

昭和十七年嚴冬

川柳雜誌社編輯局にて

編 者 識

目次

出發。船内生活……………	一
敵前上陸。進軍。クリーク……………	七
戦闘。空襲……………	一五
入城。占領……………	二五
歩哨線……………	二九
露營……………	三五
軍馬……………	四一
戦線……………	四五
慰問文。慰問袋……………	六三

宣	撫	七
戰	友	七五
汗	と 兵 隊	八一
煙	草と兵隊	八五
雜		八九

目次終

表題文字

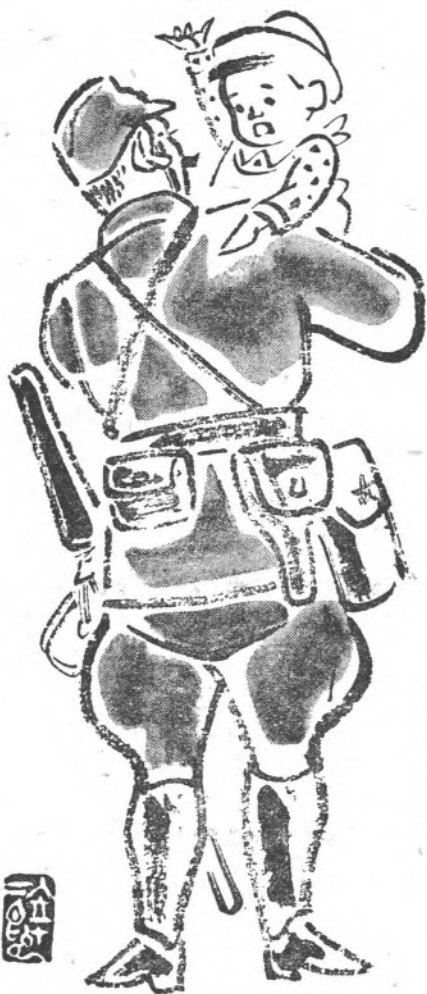
編者 麻生路郎

裝幀並挿畫

柴谷宰二郎

出 發

還らない覺悟で
抱けば子の笑顔



船内生活



火箭^{ひやう}となる今日の門出^{かきで}の日本晴れ
どの顔も顔も臉に入れて行く
萬歳のその眞^まン中を走る汽車
征くやよしひとひら雲のかがやける
出發だ注射だつはものみな元氣
還らない覺悟で抱けば子の笑顔
旗の波母の眼だけがついて来る
歡送の渦瀧壺の泡に似て

白 鳳

同

同

紅 石

久 美 夫

紅 坊

同

同

戰帽の若さとなつた腕を撫で

同

僕を送るのか日の丸が見えた村

六佳史

日本の強さ生きては歸らぬ氣

同

旗の波みんなの視線受けきれず

有明

日本に生れ征く日の日本刀

桃水

聖戦へ二度のお召しのほこらしさ

同

胴上げの下で萬歳ひびくなり

春坊

○

海の子だ水の子だよと部隊長

白

峯

腕の鳴る兵に船内狭すぎる

白

鳳

一組の將棋十人程がさし

同

日本へ左様ならして卷く碇

同

〇〇を吞まむその夜の秋の月

同

ひよいと來てひよいと起重機馬を吊り

紅

ン

坊

波を蹴る船脚速き鹿島立ち

同

關門を過ぎて色めく輸送船

同

試射をする甲板は晴れて水煙り

同

水の色そろく支那と氣がしまり

同

何時となく海でなくなる楊子江

同

黒船はみんな生命の要らぬ人

六佳史

懷しの日本水平線となり

同

日の丸のはためくもよし船で征く

浮世亭

故國よさらば甲板の雨に立つ

泰典

わが行手はろけき海のいろに似て

紅石

クーリク・軍進・陸上前敵

地下足袋でしるす
南支の第一歩



船酔ひも忘れ砂地をしかと踏み

冬

華

地下足袋でしるす南支の第一歩

正

臣

椰子の葉へ無事上陸の風があり

桃

水

吾々も世界戦史の書き手なり

白

鳳

遠征の兵に幸ありいい天気

同

○

歴史的進軍中に僕もゐる

宵

明

敵を追ふ冀南の曠野灼けつくす

同

たばこ一服東西南北麥畑

同

尖兵が蹴り轉がしたシャレコーベ

白

鳳

日本語で鴉が鳴いたなど笑ひ

同

追撃は私物氣輕に捨ててゆき

盤

根

泥濘はいつはつべきぞ午後十時

捐

得

ぬかるみをふむ一足に祖國想ふ

豐

次

百里來た軍靴の音と思はれず

双

車

行軍へ言ふなビールの話など

大

三

今日も今日も續く行軍陽は強し
濡れてゐる煙草が淋し小休止
敵はまだ遠し木影の風を戀ひ
行軍に萌ゆる大地の香に浸り
黙々と運ぶ軍靴のみたみわれ
百尺を越える木々あり山を征く
泥濘を征くに氣輕な進軍歌
電燈の街なつかしく歩を揃へ

砂詩朗

美知夫

同

松和

再來子

勝久

紅ン坊

同

首筋に馬の息する夜行軍
無意識に影だけ動く強行軍
酒ありと後續部隊へ書いて置く
前進に惜しくも焼いた内地便
行先は〇〇でよし達者なり
敗兵がまぎれこんでる夜行軍
落伍即、死なり頼るは水と脚
泥濘の卷脚絆から乾いて來

宵	沒	泉	泰	涼	捐	甲	吾
	食		典	史	得	子	一
明	子	泡	典	史	得	樓	郎

朝と晝晩も國歌の聲で征く

白 峯

トーチカの上を悠々白鴉

白 鳳

○

クリークの深さは濡れたかたで知れ

美 知 夫

クリークの流れ命を賭けさせる

紅 ン 坊

クリークの柳も芽ぐむ齒磨粉

豊 次

襲空・闘戦



伏せ暫し

土の香を

いつくしむ

部隊長胸まで沈み先に立ち

榆 次

寝撃した胸へ觸つた守り札

宵 明

萬歳を擔架の上で夢ときき

同

輕機關敵も野草も薙ぎ倒し

同

敗殘兵鼠の逃ぐる姿なり

美 知 夫

急射撃支那兵が逃げ鳥が逃げ

同

一戦が濟んで勇士も針を持ち

同

一番乗り丸きカットにゐる夫人

白 峯

演習の氣持ちがのかぬ初戦さ

白

鳳

これしきの傷と振り切る軍醫の手

同

姑娘の墓地を地物に射ち續け

同

泰然と擔架の中に見開く眼

同

母さんと雨の戦に呼んだ兵

同

逃れゆく敵もどかしくおろかしく

紅

石

伏せ暫し土の香をいつくしむ

同

敵兵の強さを愛す薄笑

同

たたかひはかくてわが手に夜が白む

同

斥候がみんな戻つたあたたかみ

同

勝つて來た胸ひろびろと又銃して

同

彼我の彈道を縫うて蝶飛べる

同

生と死の刹那を彈は縫ふてくる

紅

ン

坊

死場所はここぞと光る日本刀

同

うろたへて撃つ敵彈の高い事

囀

人

渡ればきつと狙撃する橋渡る

冠

天

初陣のおくれとるまい繩梯子
藥莢の落ちてゐる量の激戦地
砲聲はしきり電話のベルもなる
激戦のあと見返ればよい景色
装填のせめてあひまを笑ひ合ひ
鉢巻で二番砲手は殺氣立ち
市街戦どこかで甕のわれる音
肩章も失せて聯絡兵が来る

捐 得
柳 作
鈴 の 家
幸 雄
火 雷 鳥
北 羊
聖 夜
骸 花

彈の中千人針をしめて立ち

白 峯

熱帶植物背にあり彈の中を征く

同

衛生兵彈の中にも止る用

同

稻光り敵も味方も浮出され

美 知 夫

敵彈へ一句どうだと振向かれ

太 以 知

彈丸の音絶えて闘ひ嘘のやう

紅 ン 坊

支那兵へ命はやらすぶつたくり

同

本當に笑つて死んだ部隊長

同

人生きる強さよ苦戦幾日ぞ

清 峨

花カルタ傘のあり敵陣地

泉 泡

歴史は夜創られる壯烈なる戦死

松 太 樓

弾道低し噛みつくやうに伏せの聲

沒 食 子

ダメ石を入れにや分らぬ敵なのか

松 太 樓

春泥にすべらじと行く擔架兵

沒 食 子

髭一つちぎつた弾の速さかな

白 峯

何糞と銃砲聲の中に聲

白 鳳

シヤボテンの垣に夜襲のぶつつかり

同

銃聲の中で悪夢を否定する

紅

石

退散のひそけさ風があるばかり

同

逆襲に冠り馴れたる鐵かぶと

宵

明

スワ敵襲サット身内を走るもの

白

鳳

抗日の英雄あっけなく斃れ

同

○

空襲のあんなところに月があり

紅

ン

坊

椰子の葉をかすめて全機無事歸還

村 風

帽ふれば手をふり敵へ征くわが機

阿 古

空襲もなくて鳥の群がゆく

宵 明

悠々と遅れて歸る桎村機

まさを

空襲に死ねば穴掘る世話はなし

柳 作

一機まだ還らず基地は暮れかかる

太 以 知

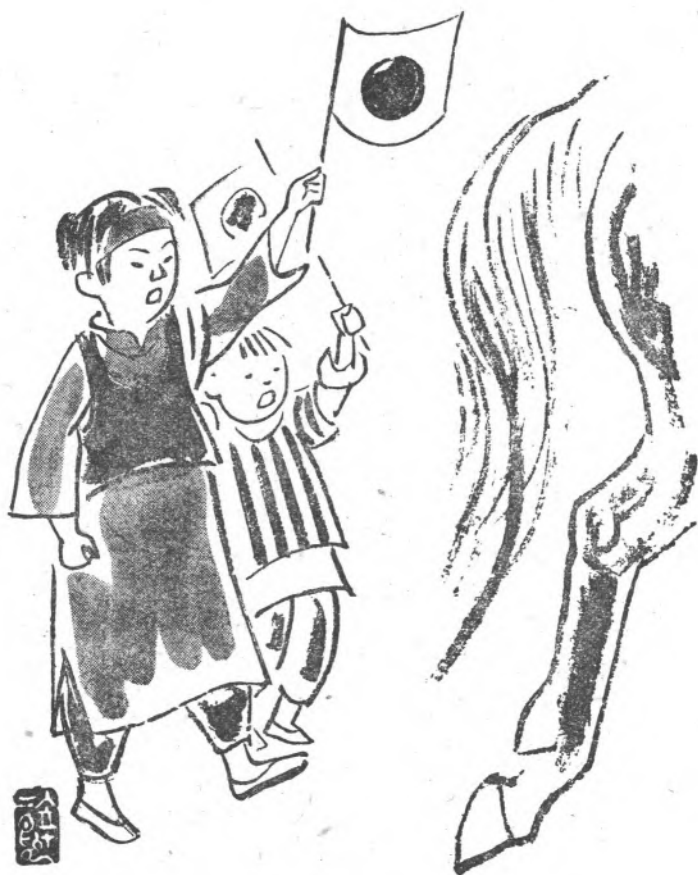
餅搗に手を振つてゆく友軍機

寛 水

空襲を笑つて甕の湯に浸り

有 明

占 入
領 城



旗章日つ持が子の那支へ城入

入城は蔣の椅子へも坐つとき

宵明

入城へ支那の子が持つ日章旗

彌吉

入城の夜は一生のいい月夜

紅ン坊

入城の軍旗へ朝日はね返る

まささを

入城の順番を待つ足のタコ

洋士

入城の馬上りりしき宮殿下

太以知

○

萬歳は他人に見せるためでなし

泰典

見た様な顔もあるなり歸順兵
我がものになつた城壁から旭
占領の名乗りをあげて見たくなり
ゴルフ場までも出来てる占領地
この町も電話がひける占領地
占領の一服煙草折れてゐる
占領へ主なき駒もいらないて
占領と書く白墨を持つてゐる

宵 明
同
草 風
進 峰
六 白
太 以 知
囀 人
蒼 水

線 哨 歩



る似に錐が聲の哨歩るす可誰

日の丸も旭も背にある歩哨

白 峯

腕巻もほたるへ寄せて行く歩哨

同

軍犬の耳もゆれてる歩哨線

同

銃劍の先に星あり故國想ふ

宵 明

立哨の動けば動らぐ晝の月

同

誰可する歩哨の聲が錐に似る

沒 食 子

チツと立つ歩哨の上を鶴が舞ひ

白 鳳

彫刻のポーズで立つて居る歩哨

美 知 夫

歩哨線墨繪の様に明けてくる

同

小孩へ歩哨我子を思ひ出し

同

銃抱いて歩哨は釋迦に似た姿

同

復哨の親子に似たる齡で立ち

同

炎天の歩哨任務があるばかり

同

雷鳴へ歩哨の姿神々し

同

虫聞いて歩哨は露に濡れてくる

同

監視哨双眼鏡に疲れ切る

同

步哨敢然と八月の陽を壓へ
 立哨中異状なし棗落つ
 ややあつて風と判つた監視哨
 凍らないものは歩哨の氣魄だけ
 今日も又熱い雲だと監視哨
 監視哨背中同士でものを言ひ
 螢にも油斷なく立つ構へ銃
 眩む午後ジツとこらえて歩哨ある

紅 石
 宵 明
 克 美
 黒 潮
 青 吾
 同
 紅 ン 坊
 甲 子 樓

髭に露ためて歩哨の異状なし

捐 得

歩哨線大日本の守りなり

洋 士

たのもしい誰可を聞いた午前二時

交 流 子

戦場で會ふた社長の息子さん

柳 二

歩哨線螢へ誰可して笑ひ

正 雄

緊張をせよと歩哨に蚊がとまる

美・知 夫

歩哨線ほたる十字に飛び違ひ

松 太 樓

蝶二つ鐵條網へ休む羽

白 鳳

營

露



陣中へ判じてくるとの文

露營の夢さめたへ夜光時計あり

靜觀堂

此の寢息決死隊とは思はれず

洋士

明日知れぬ身の正確ないびきなる

宵明

戦績を語つて餘りある飯盒

同

陣中へ判じてくれと母の文

同

短か夜の夢はサソリに醒まされる

同

屯ろしてここは蘆生の夢の跡

同

夜營する枕へ母が逢ひに來た

春坊

露天風呂支那大陸は暮れかかり

美 知 夫

共々に明日は散る身のかくし藝

同

露天風呂千人針は枝に懸け

秀 果

星あれば今日を忘れて兵眠る

圭 佑

蛇焼いて露營の夜の膳につき

鐵 兜

露營地にコック上りの兵の腕

同

母の夢見たし寢床の藁を積む

笛 二 郎

満月の中に故郷が見えるやう

富 士 榮

階級を越えて焚火に郷土兵
肩と肩假の褥も夢まどか

露營の灯明日の命を笑ひ合ひ

出發にもてあましてる豚の足

露營から見る墜ちさうな星ばかり

忍耐を露營の雨に試される

カンジンのカンジンな時驢馬がなき

甕風呂に攻撃前ののどを聞く

源

華

百

同

有

泰

泉

同

藏

咲

羽

明

典

泡

名月へ敵も夜襲を控へたか

松太樓

馬 軍



したせは言が葉言に馬の終臨

一戰欲しいか軍馬もいらないて
 したしきものに馬の呼吸馬も征く
 春崩えよ軍馬の墓標肅と立つ
 臨終の馬に言葉が言はせたし
 流弾へ傳騎二三騎闇を縫ひ
 騎兵隊軍馬と共に死ぬ氣なり
 物言へば聞きわけさうな馬をなで
 一人來て泣けるだけ泣く愛馬の碑

美知夫

紅石

同

雨音美

木九

同

秀果

清峨

突撃のラツバ軍馬も知つて居り
泥の海愛馬に負けてなるものか
素早くも俺を見つけた馬の顔
跳躍のすがたで死んでゐる軍馬

しげを
申 酔
京 斗
聖 夜

線

戰



顔うどつに圖地となた來もくけるは

日本の水が一杯だけの慾

宵

明

楊子江迷夢醒めざるまま濁り

同

見世物のやうに地雷は掘り出され

同

激戦をけろり忘れてシャツ洗ふ

同

水苔かきわけて久方の顔洗ふ

同

敵のゐる森は杏の花ざかり

同

ここが激戦の跡かや瓜の花

銃

人

どの道もみな漢口へ續くらし

同

部隊移動に虫の聲止む

九 天

武者ぶるひして戦線は明けかかり

美 知 夫

支那馬の目に抗日の色はなし

同

洗濯へ勇士の力餘るなり

同

海老捕りの土民戦さは人がする

白 鳳

一線へ寫眞屋夫婦來て儲け

沒 食 子

仲麻呂をつくぐ思ふいい月夜

同

敵は足洗つた川の水とかや

白 峯

山上の敵もハクシユの庭角力
 隊長の唄が流れる野天風呂
 男達ばかりの景色土煙
 退散のひそけさ風があるばかり
 塹壕へ芝居のやうな月が出る
 大休止千人針も干してあり
 赤とんぼ擔架を護衛する如し
 赤とんぼ戰機はまさに熟しきり

笑

波

默

人

紅

石

同

佐太郎

捐得

宵明

同

姑娘の顔も見えたり双眼鏡

白 峯

雷は嫌ひと云へぬ銃を執り

美 知 夫

慰問團銃後の唄をおいていに

同

單純な慾なり水が欲しいだけ

同

酔うてゐる軍歌は元へまたもどり

同

勝ちかけた將棋をくずす彈の音

同

一線でソースが欲しい物も食ひ

同

何氣なく思へば今日は誕生日

同

爆撃の跡で蛙は泳いで居

同

野戰料理行儀がいらぬ様に出来

同

名も知らぬ星に馴染が出来てくる

同

故郷の夢見る兵は羨やまれ

同

大砲と知らず蜻蛉は止まりに來

同

茄子焼いてこれより上の慾がなし

同

討伐を迎へる朝の風呂が沸き

同

砲聲の中で詩人の立話

白

峯

着劍で覗けば豚が二三匹

宵

明

密偵と云ふ蒼白き美少年

同

藁に寝て今日は晦日だ元旦だ

白

峯

軍刀の使ひぞめやと部隊長

同

水浴の幻惑となる麥千里

宵

明

あの顔この顔へ背囊ゆすりあげ

同

天の川敵を全く圍みし夜

同

夏草の茂りは砲の車輪まで

同

はるけくも來たなと地圖に集ふ顔

八百藏

限り無き綿へ内地の子を想ふ

英策

アンナンの子を抱いて撮る老ひし兵

映岳

佛印に馴れ土語に馴れ飯うまし

同

小休止髯の長さにふれて見る

鶴雄

南北に別れ戦果を聞くばかり

圭佑

陣中誌櫻の栞はさまれる

英策

ジャングルの夜明日章旗に誓ふ

夜鶴

ターザンが出さうな道へ日の御旗
 若葉風兵等擬装の草を摘み
 脚絆巻き直して今日も生きてゐた
 兵既にうちとけてゐる將棋盤
 斥候の一人が渉る星がゆれ
 良民證つけてよろこぶ子を撮し
 吾生きてあるなり軍旗行く處
 鉛筆が明日攻撃の山を指し

舞 華 錦 今 芳 し 雨 波
 將 咲 之 雨 弘 げ 音 陣
 助 助 弘 を 美

一億の知らぬ萬歳先にする

七 星

常夏のまだその上に眞夏来る

勝 久

自動車で来る投降も國柄か

同

燈管の艦はねむれる獅子のやう

む つ を

清正もカイゼルモ居る髭部隊

武 一

髭も一軒もやはり部隊一

ま さ を

長江へ戦争を書く女性あり

同

銃聲を霞の春の草に臥る

紅 ン 坊

とんかつになる豚試し斬に遭ひ
斥候にニハトリ咽喉を締められる
するとんは陣中料理第一課
けだものの如く敵屍を見て通り
激戦は草の血に染むところより
寝てからの時計は故國の音となり
初陣とほほ笑みながら髭を剃り
塹壕を埒に月をほめて寝る

同 同 同 同 同 同 同

チャン鍋で火線を前に飯が炊け

同

日の丸の下で勝利のペンを執り

同

はんちくな支那語で兵の用は足り

同

麻雀で覺えた支那語役に立ち

同

たき火して悼むに寒き膝頭

同

敵襲へ無線の音の一しきり

同

敵逃げて逃げて背囊又重し

清

峨

天われ等見捨てずここに芋畑

同

草花の匂ひもほしいひとりきり

洋 石

二三日寝てろと軍醫手を洗ひ

一 雨

渡河作業今に見てろの氣が揃ひ

同

陣中閑税法を讀む友のあり

か を る

よく撃つて來るなと將棋片づける

同

手を振つてだんく小さくなる弟

前線で會弟に遇ふ

甲 子 樓

陣中の人氣に下駄が一つふえ

し げ を

良民證舉手注目の禮で行く

捐 得

出征た時の顔が疎らな隊となり

規伊郎

戦線の際に景氣を語り合ふ

砂詩朗

菜の花の彼方敵陣燃え盛り

凉史

トーチカのでつぺん春を知る堇

同

春雷へ傳令一人濡れて發ち

同

食糧は後一食の鐵兜

勝久

野戦風呂眞一文字に雁が行く

柳壯

隊名の變る今日迄生き延びて

規伊郎

麥 伸 び て 農 家 育 ち の 兵 語 る
 日 本 軍 大 好 々 と 土 へ 書 き
 逃 げ て ひ る が へ る 青 天 白 日 旗
 不 精 髭 い つ か 戦 争 髭 と な り
 鐵 兜 麥 田 を 泳 ぐ 様 に 行 く
 高 梁 も 斥 候 隠 す 丈 に 伸 び
 鐵 兜 後 ろ に は ね た 男 振 り
 東 山 に 似 た る 山 あ り な つ か し き

砂 詩 朗
 草 風
 秀 果
 泰 典
 草 風
 大 三
 囀 人
 正 雄

戰へば勝つ皇軍の端にゐる

泰典

支那の彈丸九十九發は土を掘り

同

みそ汁と別れて三月髭がのび

秀朗

千人針死線を越えた色でなし

松太樓

塹壕で覗かれさうな便り書く

同

夏草へ強者共の勢揃ひ

桃水

小休止川の流れを見てゐたり

松太樓

綾太郎もどきで月のドラム罐

宵明

爆彈も螢も飛んでゐる日向

白

峯

裝甲車うしろはシャツがよく乾き

宵

明

武裝解除銅子兒五ツ六ツ出る

同

突撃は一億萬の聲となる

同

敵の死へ花一輪を手向けて來

千

彈

まどろめば南京虫もゲリラ戰

美

知

夫

手まねして苦力を使ふ露天風呂

同

羽衣の一節月に聽かす兵

白

鳳

慰問文

慰問袋



慰問品いちいち鼻につけて行く

慰問文敵を斃した手でうける

三平

軍事便禮を缺いてた人から來

美知夫

軍事便てれこゝになつて着き

同

たつた一枚の葉書が嬉し灯をともす

羅門

隊長が遺骨に手紙讀みきかせ

波濤

犬死をするなとくどい父の文

砂詩朗

小商ひながらけなげな便りくる

同

慰問文候文はたよりなし

茶人

軍事便皆久し振り久し振り
子にふれた女房の手跡なつかしき
陰膳をしてゐますとは母の文字
郵便車霧の中まで迎へられ
戦友が妬くほど手紙来る日なり
召され来てしみぐ泣いた母の筆
片假名に酬いる手柄立てられず
軍事便子供のとしを思ひ出し

美	門	富	京	英	草	鐵	白
知	斗	一	斗	策	風	兜	峯
夫		榮					

待つ便り來ずに○○戰參加
軍事便無事と書く日がまだ續き
手紙あり暫し手離す慰問品
押花が出て來た春の慰問文
來るかしら紅い封筒で細い字で
生きてれば便りよこせと父の文
引き裂いて見る初便みんな無事
嬉しさは隣へ便りわけてやり

同

同

白

春

一

か

ま

阿

楊

吉

軒

る

を

古

ニユース映畫に出てくれと便り来る

規伊郎

役員がずらり列んだ慰問文

大三

父さんと問へばバンザイと云ふ便り

錦風

女から手紙が来れば二圓出せ

笑波

慰めの文は航空便でなし

白峯

○

慰問品一人一人の朗らかさ

静浪

戦友にゆづる品あり慰問品

美知夫

貧しさの心汲まれる慰問品	慰問品どれも揮便箋紙	慰問品やがては返す氣で貰ひ	おさへたりふつたり慰問袋撰り	慰問品中味をあてる髭が寄り	車座で慰問袋のひもを解く	祝盃の肴となりぬ慰問品	日本の下駄が嬉しい慰問品
紅ン坊	同	白峯	大三	九天	宵明	同	同

慰問袋主は日露の人とあり

慰問品いちいち鼻に持つてゆき

青

泉

佳

泡

撫

宣



子菜おるやとゐらぐ子のとも子の僕

抗日の落書消して打倒蔣

白鳳

日本語を教へる兵へさす夕陽

同

僕の子もこの子位とやるお菓子

同

姑娘が三人混じる宣撫班

沒食子

宣撫治療ヨハネ馬太傳等思ひ

同

宣撫班だけが話してゐる支那語

白峯

宣撫班便衣の口へさからはず

同

宣撫班御苦勞様とすれ違ひ

砂詩朗

大蒜の臭ひ忘れて宣撫成る
銃擔ふ肩へ支那の子乗せられる
親しさは兩手になつく土民の子
宣撫班いつそ氣安な背廣服

黒潮
草風
浮世亭
一樹

友 戦



うさひほにが血の友戦ばめづゝた

戰友は明日に應へて斃する

紅石

死ぬ時が一緒でかうも仲がよし

大三

チヤンチューが得意の唄を誘ひ出し

白鳳

戰友の遺骨をしかと入城し

宵明

妹があつたらやると仲がよし

同

代筆は無事と頼んで病める戰友

美知夫

戰友の寢言は撃つて居る様子

同

戰友の訛を捨てぬ頼もしさ

砂詩朗

戦友の勵み勵ます息が合ひ

同

東京のせまさ戦友すぐ近所

舞將

もう寝たか寝たかと戦友へ着せてやり

小宰相

亡き戦友へ心盡しの水を瀧し

紅ン坊

萬歳はもう戦友の聲でなし

しげを

戦友が剃らしてくれぬ髭になり

規伊朗

戦友は手紙の主をまだ覚え

大三

そつと見る寫眞とうとう見つけられ

同

たたずめば戦友の血がにほひさう
この水を待ちしに飲まで逝くか戦友
戦友と待つたが多い王手飛車
妹のある戦友が羨まれ

泰典
正臣
松太樓
同

汗と兵隊



きかを汗ぬは負も隊部ふ違き行

知る人ぞ知る一線に立つ。汗を

没食子

號令をかけるたんびに汗が落ち

美知夫

汗を拭く順を互に譲り合ひ

同

汗かいて軍馬不平のない姿

同

行き違ふ部隊も負けぬ汗をかき

同

洗濯に困る千人針の汗

同

汗汗汗千人力の字がぼやけ

同

子の寫眞汗に濡れてるまま笑ひ

同

一寸待てと軍醫も汗をふき給ふ

同

勝鬨へ聯隊長の鼻の汗

紅ン坊

占領の歡呼は汗に氣がつかず

同

大汗に讓つてくれる風呂の順

美知夫

言ひ譯をみんな信じてくれる汗

同

病兵に蠅黒々といたましさ

白鳳

煙草と兵隊

鐵帽と鐵帽がちり

合ふ煙草



城壁の煙草日本の方を向き

美知夫

喫ふところはなほと捨てる八人目

捐得

戦友の鐵帽でする煙草の火

柳二

おい煙草ないかが戦地御挨拶

大三

次に喫む者に煙草はみつめられ

一雨

鐵帽と鐵帽がちり合ふ煙草

北羊

突撃も眞近か煙草の喫み廻し

砂詩朗

凹んだ眼同志でわけて喫む煙草

草風

一本のマッチへほまれ寄つて来る

煙草の火消して夜襲へ立上り

雨久花

志郎

雑



和日といるせら刈に下部長隊部

前線を交代しては搗いた餅

靜觀堂

秋草に添へて

ノモンハンに咲いたいのちと思召せ

同

陣中閑手相骨相字劃など

沒食子

酒保歸り歩哨に濟まなひと思ひ

宵明

戦争に敗けてアイウエオも覚え

白峯

子が歩く夢現實は敵の土地

美知夫

慰問團大阪辯も嬉しいぞ

同

寢言もう支那語がまじる様になり

同

午後六時支那も夕餉の煙が立ち

同

千人針臍と馴染んで小一年

志郎

手柄などないと勇士は笑ふのみ

美知夫

准尉と〇〇勤務の一等兵兄弟の奇遇

捧げ銃あとは肩章抜きとなり

同

殿りの車輛に豚と鶏と

宵明

つはものの寝物語りは母に觸れ

同

豚が鳴く今宵は豚の汁と知る

同

傷兵の何を求めて佇める

同

手のとどくところへ傷兵寫眞おき

同

曼珠沙華ここにほしや勇士の碑

同

装甲車覗けば胡瓜刻んでゐ

同

ぐつと干す酒あり菊花御紋章

まささを

部隊長皆喰べたかと聞いて喰べ

同

部隊長部下に刈らせるいい日和

武一

歸隊して千人針の有難さ

同

金高で出てくる勇氣支那の兵

七郎

防 共 で 握 り 文 化 で 又 握 り
 お 月 様 不 利 な 角 度 に 出 て 給 ふ
 名 月 を 古 風 に 賞 め る 部 隊 長
 兵 の 夢 大 福 の 夢 壽 司 の 夢
 見 知 ら ぬ 兵 と 交 す 盃
 實 戰 談 戰 友 の 手 柄 も ち と 交 り
 神 の 子 に 日 本 の 母 は 泣 き ま せ ぬ
 國 訛 り 隊 長 の 髭 親 し ま れ

正 夫
 太 以 知
 醉 車
 島
 右 門
 祐 弘
 清 峨
 同

我儘な過去をはつきり知る戦地

同

兵隊の支那語終にデーをつけ

一 雨

便り書くまでも女房へかと訊かれ

砂 詩 朗

愛すればこそとは部下へいい言葉

昭 象

残月へ一線近き貨車を降り

同

豆一毛銭戦闘帽を出してうけ

雄 次 郎

支那人の小さな嘘に隙がなし

ゆ め 路

お湯を賣るだけで生活して行ける支那

砂 詩 朗

日本の匂ひ活字にもりあがり

○日間防疫隔離

颯爽とねぎ五六本提げてくる

大任を果して解いた巻脚絆

子煩悩の日

頬ずりへ夢でよかつた不精髭

虎造もアチャコも居ます軍旗祭

前線も銃後の勞苦見逃さず

同文同種の敵をあわれむ

纏足のいつそ哀れな負けいくさ

素風

泰典

錦風

同

同

松太樓

宵明

同

皇軍の下婚禮もつつがなし

同

故大樓さんへ

陣營の夢にも立たずそれつきり

同

水牛も使ひ戦車も乗る兵士

白

峯

鍾馗髭バナナの前に立つて撮り

沒

食子

寄せ書の國旗初日にひるがへり

同

還送へ髭はさみしい笑となり

美

知夫

遺品の中の「麥と兵隊」

宵

明

日の丸の端へ日記も書く日向

白

峯

廣東の街で右向け左向け

同

栗はぜる頃なり支那も落葉する

美知夫

支那の子へ父はと聞けば涙ぐみ

九天

雲烟の彼方巍然と古い塔

白鳳

後記

支那事變が勃發して一年目、昭和十三年の晩夏に私は北支蒙疆の旅に出た。その第一の目的は北支蒙疆の人情風俗習慣の研究であつた。それは從來、日本と云ふ國は戰爭には捷つが戰後の發展とか建設とか云ふ方面にかけては頗ぶる拙であるとか聞かされてゐたので、支那事變が片づいた時、同じやうなことを繰返へすやうでは國を擧げての聖戰も九仞の功を一簣に缺くうらみがないとも云へないので、この點についての研究を續け筆による御奉公が出来得ればと云ふ念願からの旅であつた。尤も支那事變がさう簡單に片づくとは考へてゐなかつたので、第二第三の訪支蒙疆の旅に出る覺悟で、先づ事變直後とも云ふべき頃の北支蒙疆を知ることであつた。この希望は事變前から張家口に在住する岩崎柳路氏（目下、張家口の民團議員であり、張家口日本商工會議員である）の好意で果すことが出来

たのみならず、氏は終始カメラによつて私の目的を援助されたのである。

歸阪後の私は、約半歳にわたつて、私の主宰する「川柳雜誌」誌上に北支蒙疆の印象を執筆して現地の報告を詳にしたと同時に、國民學校（當時はまだ小學校）の父兄會、或は實業家の有志團體、婦人團體等に、先づ汝の對手を知れと云ふ意味で、北支蒙疆に於ける支那人、蒙古人等の性格、風習等々に就て、詳細な報告的講演を試みたのであつた。

第二の目的は皇軍慰問と戰跡視察であつた。そして皇軍將兵が如何に多大な勞苦を嘗めつつあるかを如實に、眼に視、耳に聽いたのであつた。歸阪してからの私が微力のあらんかぎり皇軍慰問に致したことは云ふまでもない。大阪市の刊行した慰問誌、堺市が郷土將兵のために刊行した慰問誌、其他の新聞雜誌、展覽會等々に多くの時日を費して慰問の赤心を披瀝したが、なほ足らざるもののあることを痛切に感じてゐた。戰局の擴大は遂に大東亞否世界にまで及んだ。皇軍の

勞苦は全く筆舌に絶するものがあるのである。銃後國民の一人として、そこには幾ら感謝しても感謝し切れないものがある。「陣中川柳」はまことに小冊には過ぎないが、遠く異域にある皇軍將兵への慰問の一端に資することが出来得ればと云ふ念願の下に編纂したのである。

（麻生路郎）

昭和十八年二月二十五日印 行
昭和十八年二月三十日發 刷

二〇、〇〇〇部

陣中川柳

定價三十五錢

送料十錢

出文協承認ア330365號

編者 麻生路郎

發行者 大阪市西區江戶堀南通二丁目三
烟 米 吉

印刷者 大阪市北區南錦町四六
今 村 燦 三 郎

發行所 大阪市西區江戶堀南通二丁目三
興亞書局

日本出版文化協會々員 (振)
大廣五二三六六番
一一〇〇四六號

配給元

東京市神田區淡路町二丁目九番地
日本出版配給株式會社

どんなに忙しい人達にも「川柳雑誌」は

麻生路郎★主宰

月刊

川柳雑誌

(創刊大正十三年)

毎月一回一日発行
定價 一部 三〇銭(税一銭)
半年 一圓八〇銭(税六銭)
一年 三圓六〇銭(税一二銭)

★人生勉強になると喜ばれてゐる！

★川柳の妙味を識るにも、新進の登龍門にも唯一の近道だと激賞を浴びてゐる！

★川柳の社會進出に燦として輝く本誌の歴史！ 有保證新聞紙

法に據る刊行の柳誌は本誌あるのみ！

★戦線慰問は記事の豊富な「川柳雑誌」で！

大阪市西區江戸堀上通二ノ四六 昭和ビル

發行所 川柳雑誌社

電話土佐則 3333・8163・8164
振替貯金口座 七五〇五〇番

